

第51回定期演奏会 批評

Concert Reviews



東京ニューシティ管弦楽団

オーケストラ
東京ニューシティ管弦
楽団 (第51回)

ショパンの全楽曲を校訂するナシヨナル・エディションの編纂が進められているが、その版を用いた『ポランド民謡の主題による幻想曲』と、『ピアノ協奏曲第一番』が演奏された。ともに日本初演ではあるが、『幻想曲』についてはオーケストラ部

分の改訂がまだ完成されておらず、ピアノのみナシヨナル・エディション。指揮は内藤彰、ピアノは版の編纂にも関わっている河合優子。

まず驚くほどパデレフスキ版などの旧版とは異なっている。アーティキュレーションや、これまでタイでつながっていた首を弾き直す箇所から、音程そのものが違う音もあり、思わずミスをしたのではないかと疑ってしまうほど。しかしながら演奏そのものは極めて高度であり、河合は華美すぎない絶妙の詩情と気品を湛えた、みずみずしい情感を紡いで心に深く残った。

またメンデルスゾーン「交響曲第3番『スコットランド』」では、ブライトコップ新版2006を使用、ノン・ヴィブラート奏法を軸に演奏されたが、そのアンサンブル能力は感嘆するほどに見事。躍動する生命力と疾走するようなテンポ感で、揺るぎない造形と極めて濃厚なロマンティズムを織り上げた。6月8日・東京オペラシティ

●真嶋雄大